



市民公開フォーラム

# 地域医療を考える

～ライオン、Dr.コトー、野ウサギJr.～

日時 2014年10月25日(土)  
13:00～16:00 (開場 12:30)

会場 ホテルニュープラザ久留米  
久留米市六ツ門町16-1

# 海外医療協力 風に立つライオン ～LOVEのたてがみ 生(活)きる力は患者さんから

前宮崎県立日南病院長

柴田 紘一郎さん



1940年、大分県生まれ。長崎大医学部卒。71～73年、ケニアの州立ナクール病院に赴任。外科、整形外科、婦人科、泌尿器科のあらゆる手術を手がけ、海外地域医療に尽くす姿は、さだまさしさんの歌「風に立つライオン」のモデルになった。宮崎医科大第2外科助教授などを経て、宮崎県清武町で介護老人保健施設「サンヒルきよたけ」施設長。専門は胸部外科。日本外科学会指導医。日本胸部外科・肺癌・内視鏡外科・呼吸器外科学会各特別会員。

それぞれの人がこの世に誕生してきたのはある意味、奇跡です。そして、自分にもわからない崇高な役割を担って、生老病死の苦界のなかでお互い助け合い、支えあって、生きていかねばなりません。そのどんな過程においても病（やまい）がそれを妨げることもあります。

現在は、医療はキュア（治療）とケア（支え）が渾然となって命を支え、命の意味もひととそれぞれに考え方があることもある多様化の時代となっていました。また、命とはひとりのものではなく、大昔より未来へつづく人類リレーのバトン走者のようなものだとも考えます。

人はみんなこの世に誕生したゆえの使命とそれに付随する夢があると思います。私の卒業大学の図書館の掲額には「科学を学ぶ、医学を学ぶ、そして人を学ぶ」とありましたが、年を重ねるに人を学ぶの意味が厚くなっています。

私は、子供の頃からの憧れはいつか、アフリカに行ってシュバイツァーみたいな医療で貢献できることを夢見ていましたが40年前に同地（ケニア）に行くチャンスを得ました。同所での2年余りの診療経験は小生の医療の原点「生（活）きる力は患者さんから、成長の源」はこの時のおもいの結晶であるといっても過言ではありません。その後、帰国してからは、主に肺がんを中心とした呼吸器外科に従事して長らく患者さんの治療にあたってきました。

そのなかで、患者さんから多種多彩のことを学んできて、また学ばされてきて、医療とは患者さんを中心に各医療関係者がお互い良好な信頼（人間）関係をつくり診療にあたっていくことが重要（キーポイント）だとつくづく感じてきております。

この両者の橋渡しとして、私はLOVE運動を提唱しております。

LOVEとはL=Listen（聴くこと、患者さんの話を共感を持って傾聴すること。）O=Overview（常に人間の尊厳を第一義に大きく全体を俯瞰すること。）V=oice=（声は言霊ともいいます、心の交流を醸し出す話し方をすること。）E=Excuse（お互い許し、許されあう信頼性の確立で（恕、慈））です。医療は病人の為にあり、医療職の為にあるものではありません。

これらを念頭において患者さんとふれあい、そのことからたどり着いた人間の尊厳、ポジティブに生（活）きる意味、命の理由、重さについて浅学非才の身ながら愚考を述べさせていただきます。

# 離島の人を助けたい ～Dr・コトー診療所奮戦記

鹿児島県薩摩川内市  
下甑手打診療所長

瀬戸上 健二郎さん



1941年、鹿児島県生まれ。鹿児島大医学部卒。同付属病院、国立療養所南九州病院外科部長を経て、78年に下甑島へ。難手術から、内科、産婦人科まで引き受け、島の人を守る姿は、漫画・テレビドラマ「Dr.コトー診療所」のモデルになった。甑島地域医学研究会代表。「Dr.瀬戸上の離島診療所日記」（小学館）を出版。専門は胸部外科。診診連携、全国の医大から研修生を受け入れ、IT活用の医療連携にも努める。医療功労賞・中央表彰を受けた。

島酔いと言う言葉があります。酒に酔ったのと同じで煩わしい都会生活から解放されて月日の経つも忘れてしまう、そんな状態でしょうか。そういえば浦島太郎の話はまさに島酔い物語なのかもしれません。もちろん、島酔いにもいろいろありそうで、必ずしも夢見心地とは限りません。島に長年暮らしていると、一刻も早く逃げ出したくなるような二日酔い的な島酔いに苦しむ人もいます。

私が、半年の約束で島の診療所にお世話になったのは昭和53年ですが、以来、いつの間にか36年が過ぎてしまいました。浦島太郎の700年（？）には足元にも及びませんが、私も島酔い状態だったことは間違いないようです。

さて、この36年間、日進月歩の医療の世界で離島医療も大きく変わってきました。医師不足は緩和されたものの、単なる医療の確保から医療の質の確保が求められるようになっています。

一方、いつ何が飛び込んで来るかわからない離島医療は、まさに本物の総合診療とも言うべきもので、非常に厳しいものがあります。また地域住民のニーズも時代とともに常に右肩上がりで、それに応えるのは容易なことではありません。中でも離島救急は最も重要です。船もヘリコプターも間に合わないことがあるのが離島医療の厳しいところで、繰り返ってきた離島ゆえの悲劇を断ち切りたいというのが村長さんの悲願でした。

しかし、島で本格的に救急医療をやろうと思えば、離島医療のすべての問題が浮かび上がります。私が島にお世話になった昭和53年当時の手打診療所は、看護婦はたった二人、麻酔器もないという典型的な離島診療所でした。そんなところではたして手術させてもらえるか。問題は、人材確保や医療機器の整備だけではありませんでした。最も重要なものの、それは医療の原点と言ってもよい住民との信頼関係でした。

いくら歓迎されたといっても、それは信頼されてることにはならないのです。

離島医療36年を振り返ってみます。



甑島の「ナポレオン岩」。漫画・テレビにも登場した島の名所だ

# 長野県諏訪市の山間僻地診療三代目 ～野ウサギJr.走り出す

長野県諏訪市・  
諏訪豊田診療所院長

小松 佳道さん



1975年、岩手県盛岡市生まれ、長野県諏訪市育ち（4歳から）。東海大学医学部卒。信州大学医学部大学院修了。2008年から、諏訪赤十字病院呼吸器科勤務。09年、同科副部長。13年4月、祖父～諏訪中央病院の鎌田實名誉院長とともにさだまさしさんの歌「八ヶ岳に立つ野ウサギ」のモデルとなった父道俊さん（同年5月逝去）の後を継いで、現職に。長野県福祉大学校非常勤講師。専門は呼吸器内科。日本内科学会認定医、日本呼吸器学会専門医。

私が診療に通う山間の集落や山里は僻地とか辺鄙な山村とか過疎地とか言われる。しかし、それらの村々には平坦な市街や住宅地とは違う新田開発以来数百年の長い歴史があって、村人の絆はより強い。如何に山奥であろうとも、住む人が孤独でなく幸せであるなら、そこは“僻地”なんかではないと私は思う。今の時代、孤独で不幸せな人は人情が希薄になり孤立化しつつある都会や町中にこそ多いのではないかと考えさせられる。厳しい自然と向き合い不便に耐える生活ゆえに心身共に逞しくて人情豊かな人々がいる。

『日本の国土を人の体にたとえれば、山間地は手足の指先に当たる。その指先までが元気であるなら日本が元気であることになる。その指先が元気ということは、この国が元気ということ。山の中で頑張ってきて幸せだと思ってもらえるなら、そのために役立てるなら、自分の人生は惜しくない。』そんな風に山間地への熱い想いを語ってくれた父は昨年肺癌で他界した。地道な山間部無医地区診療を続けてきた父は、地域医療に取り組む諏訪中央病院の鎌田實先生と共にさだまさしさんが「八ヶ岳に立つ野ウサギ」という歌にしてくれた。「風に立つライオンとまではいかないが、野山をかける野ウサギのように頑張りたい」とさださんに話したこと。

山間僻地診療を祖父が創めたのが昭和17年。当時は険しい山道を馬に乗って診療に向かっていた。血圧測定・減塩指導などをいち早く取り入れて山の人たちを指導した。昭和52年からは父が引き継ぎ、すでに始まっていた高齢化・老老介護の実情を感じ取り村人の暮らしを見つめて診療を続けてきた。昨年からは私が引き継ぐことになった。道路は次第に整備され、冬も除雪車が入るようになった。それでも村々はますます高齢化が進み過疎化が進んでいる。約70年間続けてきた山間地診療の小さな明かりを燈し続け、日本の手足の指先の温もりが保てるように私も頑張っていきたい。祖父、父のあしあとを辿りながら、野ウサギJr.として山を登り続けたい。

最近、“あと10年以内に数千の村が消えようとしている”という報道を見た。美しき日本の山河を守る人々が居なくなるという。私もそれを肌で感じている。悲しいことである。しかし、受診のために集まってくる村人たちや自宅へ訪問する患者さんたちには共通の笑顔が有る。その笑顔のためにも続けようと思っている。